



医局制度を復活させよう

十勝医師会
公立芽室病院 院長
小窪 正 樹

私の勤務する病院は、一般病床150床の中規模病院ですが、隣接する帯広市までは車でわずか20分と近く、運営方針を地域医療主体にするのか、専門医指向の病院にするのか難しい位置にあります。芽室町は経済的に右肩上がり、人口も増加傾向にあり、高齢化率は23.4%と決して高くはなく、他町村にはない恵まれた環境下にあります。専門医中心の病院をという要望もあり、現在は地域医療と両者をミックスしたような病院作りを目指しています。昨年からは町民有志による「病院を支える会」が発足して、地域住民に支えられながら今日に至っております。当院は、医師が勤務する条件としては決して悪くはないと思うのですが、医師確保は以前では考えられないほど厳しくなってきました。2004年の新医師臨床研修制度以降は、医局からの派遣が切られ、2007年に導入された7対1看護制度以降は、看護師確保に困難を感じるようになりました。地域医療崩壊は国の施策ではないだろうかとつい考えてしまいます。

当院で多大な貢献をされた小児科医が病院を後に

しました。小児科診療への痛手はもちろんですが、年間300余例の新生児をどのように扱うべきかはさらに大きな課題です。基幹病院の産科医・小児科医は現時点でさえギリギリの状態です。そこに当院の妊婦が駆け込めば、ドミノ倒しの様に医師が疲弊し、十勝全域の周産期医療崩壊につながりかねません。現在は、「集約化」の名の下に、中小病院への派遣切りが当然のごとき風潮で進んでいますが、果たしてこれが、本当に医師や住民の幸せにつながるのか疑問に感じています。

新医師臨床研修制度発足以来、医局に所属しない医師が時折勤務されるようになりました。真面目な方もおられますが、中には、常識では考えられないような行動を示す方もいます。目の前に腹痛で青くなっている患者がいても診療時間が過ぎたから診ない、診療態度を注意すると病院を辞める、周囲がどんなに困っていても入職時の条件以外のことはしない、金銭的なことを条件に行動する等々です。一昔前には、まったく見られなかった人種であり、いたとしても鬼軍曹のような大先輩が医局にいて、厳しく指導され正されるのが常でした。医局制度は、いくつか問題を抱えていたことは否定しませんが、それ以上に人間形成において重要な役割を担っていたと、今、改めて思います。皆さんの意見とは違いますが、昔の医局制度に戻すことが、地域医療だけではなく日本の医療を救う一番の解決法と感じています。

北海道医師会 女性医師等支援相談窓口を ご存知ですか？

北海道医師会では、お忙しい医師のために
育児支援事業や仕事と家庭の両立を支援するために、
現役の先輩医師による相談窓口を開設しています。
詳しくは、以下の専用ホームページをご覧ください。

●育児支援 ●お悩みコーナー ●復職研修支援



北海道医師会 女性医師等支援相談窓口

●詳しくはこちらをご覧ください 「女性医師等支援相談窓口」専用ホームページ <http://www.hokkaido.med.or.jp/josei-dr-shien/>
●ご相談はこちらへ ☎ 0120-112-500 FAX 011-231-7272 E-mail josei-dr-shien@m.dou.jp
北海道医師会 〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目 <http://www.hokkaido.med.or.jp/>